

土 淨

昭和十年五月廿三日第三種郵便物認可（毎月一週）日發行
昭和二十一年四月二十八日運輸省特許後承認雜誌第三五二號
昭和三十一年十二月二十五日印刷 昭和三十一年一月一日發行

第二十三卷

第一號



天香堂
光

一月號

目次

昭和丁酉元旦

謹賀新春

法然上人鑽仰會

浄土曼陀羅と祖道の開顯……………野々村學念(2)

童話 寒い夜の話……………高橋良和(5)

三門について……………村上博了(19)

呈蓮寺春秋……………兒玉遂旺(30)

新しい浄土……………椎尾辯匡(1)

修正會……………佐藤密雄(9)

宗門人各界展望—教學の卷……………(12)

滯印日記(一)……………春日井眞也(15)

ホノルル通信 第七信……………松濤弘道(23)

凡人のための教……………佐藤賢順(25)

觀無量壽經講話(やうしん)



新しき年

芳村 雅之

昨年、世界共に佛紀二千五百年となりて、明治以降邦人の往詣するもの僅に指を屈したるネパールに、代表四十余參詣した。論註の著者曇鸞によりて仰がれる玄忠寺は、中共によりて改修され、淨土宗、眞宗東西から三師御影が贈られ、彼は之を掲げるために新堂を建てた私の南北一乘論は、既に幾多の共鳴を得たが、原始佛教の念佛往生淨土義は、新年と俱に確認を増すであらう。淨土は唯兆載永劫の古い安立、十劫徒に一立古念然たるのみでない。念々新らしく、日々退轉なく、進歩止まざる壽光界であり、清淨土であり、眞にいかされる儘にいきる無餘依大涅槃界である。

今年こそ、舊套を脱ぎ、宿弊を捨てて、眞に新しい淨土に生れる悦びを體現し、觀音勢至を始とし、算數の計算し得ざる無數の一生補處大菩薩清淨大海衆たる上品上生群こそ、法然上人凡入報土として導き、自から死後はすべての人々の念佛する所に還ると仰せられた如く、念々に増し來る還化力に、彌陀本願力の新らしさ、輝増す淨土の新らしさを喜ぶことに於て、活とした淨土を尙び、社會福祉の増進、如來大業の分擔に南無阿彌陀佛する新世界の佛紀二千五百年に喜び仰ぐことを、新年の辭とし卷頭言の需に答えさせて頂きます。

淨土曼陀羅と祖道の開顯

野々村學念

昨年は佛紀二千五百年といふので、印度佛蹟セイロンに於ては、種々記念行事が行はれた。又、元祖法然上人の七百五十年遠忌は目睫に迫つておる。吾々佛徒としては、教祖宗祖の鴻恩を謝すると同時に、佛陀並に祖師の垂訓を、日常生活の上に、生かし生かされることこそ、眞の報恩であるといふべきである。

佛陀釋尊は成道後、諸所遊歴教化せられたが、老後七十二歳頃は、摩訶陀國都王舍城の東北に聳ゆる靈鷲山上の大巖洞内を道場として、法華經を盛んに御説きになつて居た。王舍城主頻婆娑羅王は、釋尊教團の食生活を保證し、王舍城より山頂に至るまで巾十數歩長さ一里有餘の山路を造築して一般參聽者の便をはかり、自らも登山聞法するといふ熱心さであつた。釋尊が斯様に頻王の厚き歸依をう

け、法華經說法中麓の王舍城内に一大悲劇が起つたのである。城主頻婆娑羅王が、提婆の惡勸をうけて血迷ふた太子阿闍世の爲に、七重の牢に閉籠められ牢死せんとし大王を助けんと食物を竊かに運ばれた。王妃韋提華夫人が、又阿闍世太子の害刃にかゝつて命を取られんとした折しも、重臣耆婆月光大臣現はれて太子を攻め切諫した爲に、太子は刃を鞘に納め母を七重室内に幽閉するといふ大悲劇である。

此時、釋尊は韋提華夫人の請を知召して法華經の説法を中止し、弟子目連と阿難を伴ふて靈鷲山を下り、王舍城に入り阿難及び韋提華夫人を對告主として、未來世の一切大衆の苦を脱れんと欲う者の爲に、是の觀地法を説くべしといつて脱苦法、觀地法、念佛法を御説きになり、畢竟念佛法が最も大切であるといつて、念佛の法を阿難尊者に付屬して説法は終りを告げたのである。佛陀の教訓によりて、頻王は不還果といふ悟を得て遂に命終され韋提希夫人は、無生忍といふ苦難の娑婆にあり乍ら苦難の爲に心を傷付られず、苦難の波を乗越えて行く悟りを得られた。阿闍世は、後になつて恐ろしい業病に苦しむ身となつたが、母の柔輓心に感激し、父王の慈愛を知り、迷夢より覺め母と耆婆の勸めによつて、佛陀釋尊のみ教を頂き、業病癒え苦惱より救はれ、安心平和の中に喜び生きる身となり、王舍城の悲劇は終りを告げたのである。釋尊が、王舍城の化益を終りて靈鷲山に御還りになつてから、巖洞の

中で記憶第一の阿難尊者が、釋尊に代りて千二百五十人の阿羅漢に王舍城内に於ける釋尊の説法を復説せられたのである。この釋尊の言葉を文字で書き残されたのが觀經といふ御經であり、釋尊の言葉を繪畫に畫き残されたのが淨土曼陀羅である。佛陀釋尊の御入滅後、千年程して印度の三藏置良耶舍が、此觀經を携へて印度を出發し苦難の旅をつゞけて支那洛陽へ到着した時は、宋朝第三世文帝の代であつて、文帝は三藏を厚く崇敬して鐘山の道林寺に住はしめた。置良耶舍は文帝の命をうけて、觀經を漢語に譯し、諸所に佛教を弘め江隆に於て年六十歳、遂に傳道の旅に斃れて了つたのである。

更に、中天竺の沙門迦葉摩騰竺法蘭が、支那に來り五臺山に登り草庵を結び、佛教の翻譯弘法に盡力した時は、後漢明帝の代であつた。此時、摩騰の姉が出家して、其一行に加はり天竺の鷄頭摩寺にあつた。五通曼陀羅を將來し、之が次々に轉寫されて、支那國中に弘く流行したのである。爾後、善導大師が、唐の大業九年泗州に生れ十歳にして出家し、明勝法師の弟子となる。十五歳にして諸國求道の旅に出で、或寺にて彌陀變相を拜し、歎じて曰く、質を蓮臺に託し神を淨土に棲ましむべしと發願し、遂に六十九歳にして命を終るまでに、彌陀經十萬卷淨土曼陀羅三百鋪を畫き、觀經疏（四帖疏）を述作し、隨所に曼陀羅を掲げて自行を勵み、人をして極樂莊嚴を拜せしめて宗教心を發起せしめ、本願の大道彌陀の正意を顯彰されたのである。

即ち、善導大師は、佛陀釋尊の教旨を念佛修行の中に體現し、深く佛法の内證に直入し、其内證感動を文字化して四帖疏とし内證を繪畫化して淨土曼陀羅とせられたのである。

此善導大師の遺法が、日本に傳來され依所となつて日本淨土教が興隆したのである。日本淨土教の元祖法然上人は九歳にして父時國公と死別し、父の遺言によりて、十五歳にして母秦氏公を故郷美作稻岡里に残して比叡山に登り、道を學ぶ事廿有六年、遂に、承安五年春三月御年四十三歳善導大師の遺著觀經疏散善義の文、一心專念彌陀名號行住坐臥不問時節久近念々不捨者是名正定之業順彼佛願故の三十四文字に御目が止まり、濶然として他力の大道を悟り給ひ、立所に餘行を捨て、一向專修の行者となつて、吉水草庵を根城として淨土門の法幢を高く掲げ、八十歳建曆二年正月廿三日、後の世を照す一枚起請文を書殘し、正月廿五日御入滅（昭和二十六年が七百五十年遠忌正當）に至るまで傳道の旅に身を捧げ給ふたのである。上人の自行化他の片鱗を伺ふて見るに、御所持の笈には、曼陀羅様の三尊聖容が祀られ、諸所に攝取不捨曼陀羅を掲げて救世の大法を叫ばれ、上人の教は、疾風の枯葉を卷くの勢あり、上人は迫害の加はる程結束を固くし、自重して信行を策勵せられた。

文治元年春上人五十三歳、四天王寺の主務慈圓僧正に招かれ、浪速に草庵を結び、新別處とし勤修年あり、後白河法皇臨幸し給ひ、上人相共に日想觀を修し給ふ。夫木抄には阿彌陀佛といふより外は津の國の

なにわのことともあしかりぬべし

法然上人。

難波渴西に入る日をながむれば

よしあしともになむあみだぶつ

後白河法皇。

とあるは、日想觀御修行の折、御唱和あらせられた御歌であるといはれてゐる。

勅傳三十卷には

建久二年の頃(上人五十九歳)、上人を請じ奉りて、大佛殿のいまだ半作なりける軒の下にて、入唐の時わたしたてまつりし觀經の曼陀羅ならびに淨土五祖の影を供養し、又淨土の三部經を講ぜさせたてまつりける、と記されてゐる勅傳七には

大師專修正行年を累ね、一心專念功積み給ひしかば、遂に口稱三昧を發し給ふ。生年六十六、

阿彌陀佛と申すばかりをつとめて

淨土の莊嚴見るぞうれしき

の御歌もある。

選擇集の歸正行篇には五種正行を説き、觀察正行の條下には、觀察正行とは一心に彼國の二報莊嚴を專注し、思想し、觀察し憶念することである、と御教へになつて居る。

二祖鎮西上人は二重卷領解未代念佛授手印鈔に觀察正行を説く條下に

行者の根機に依つて觀門の廣(十三觀全部)略(十三觀の中一或は二の意)を行すべし、觀經に依らば十三觀を用ゆべし、と教へられてゐる。

三祖記主上人は、三重領解未代念佛授手印鈔に、觀察正行は十三觀に通ずるや否やと問を掲げ、その答として十三觀に通ずるが故に文に二報莊嚴といへり、二報といふは一には正、二には依なり、依に前の七を攝し、正に後の六を攝す、と教へられてゐる。

更に、記主上人は、正定業と二報莊嚴觀察行との關係に就ての疑問點を沒答疑門鈔に、二報莊嚴觀察行は、口稱の一行を策勵する上に最も大切な旨を説き、念佛は主食の如く觀察二報莊嚴は副食物の關係の如くである意を、懇ろに決答を述べられてゐる。

三祖に續いて西譽上人、聲譽上人、西阿上人、大順上人立禪和上、陳阿上人、安譽上人、梁定上人、滿譽上人等々曼陀羅教學の諸法將によつて佛陀宗祖の宗旨流義が滾々として笈水の如く流れて來て居るのである。

今や終戰十二年、國力漸く整はんとし、いかなる山間避邑に至るまで物質文化の惠澤に浴する日進月歩の世相ではあるが、しかし精神文化面は果してどれだけ高められたことであらうか? 王舎城の悲劇は現代世相反面の一縮圖ではなからうか、王舎城の悲劇を救ひ得た淨土教こそは、精神文化向上の一大基調をなすものであることを提唱するものである。かゝる意味に於て、淨土曼陀羅に對する認識を新たにして、之を生かし之に生かされゆくことこそ、教祖宗祖の鴻恩を謝し、祖道開顯の道であると確信する次第である、(昭和三十一年十一月十日脱稿)

童 話

寒 い 夜 の 話

高 橋 良 和

源じいさんはちやんちやんをぬいで、ねまきにきかえました。

「寒いの——。」

源じいさんは思わすくびを龜の子のようにすつこめました。

よこで孫のけん坊がじーつと立つてみています。

「けん坊お前は子供じやから寒くないじやろ。」

「うん、おらあ大丈夫だよ。」

「そうかい、おじいさんは年がとつたから、身體も寒いし、その上に足がひえてのう。」

源じいさんはそういうと、モンペをとつて、もゝひきもぬぎました。

寒い寒いといゝながらも、源じいさんは昔からのくせで、すつぽりとねまきをきなければ寝ないのです」

「おらあ、シャツなんか着ると肩がこつてのう。」

どうやらはだかになると、くるくるとひもでまいて、押し入れにしまつてあるねまきを取りだしました。

「おゝ、寒む。」

と、かん高いひとこえをたてるとつめたいねまきにすつかり着かえました。

「さあ、ねるぞ、けん坊、お前もそのおふとんに早ようねんかい。」

となりに敷いたけん坊のふとんを指さしながら源じいさんはするすると、ふとんのなかにもぐりこみました。

そしてふとんを肩のところまでかぶると目を大きく開きながら、

「けん坊早よう、ふとんにもぐれ、ほんとうに極樂じやの——。」

と、息を大きくはきました。

源じいさんのふとんのなかには、もう早くからこたつがはいつていて、ほか／＼と足先をあたくめてくれています。

「ほんとうに極樂じや。」

また源じいさんはそうい／＼ながらにつこりと笑いました。

横にいたけん坊はおじいさんのようすを見ると、思わずはなしだしました。

「おじいさん、おじいさんはいつもねると極樂じやというけど、極樂つてどんなことをいうの、あのこたつのあた／＼かいこと。」

「あつはつはつはつ……こたつのあた／＼かいことつてか、あつはつはつはつはつ。」

源じいさんは大きく笑いました。

「いやなおじいさんだな、人が聞いているのに。」

「それがおかしいんだよ。」

「ふうん、極樂がおかしいの。」

「いや、極樂はおかしくはないが、お前がこたつのあた／＼かいのを極樂というから笑つたのさ。」

と、いいながら源じいさんはまたあつはつはつはつと笑いしました。

「けん坊、まあ、寒い夜、つめたい身體をふとんのなかにはいつてごらん、あのこたつのあたゝかさがすーつと兩足から身體中にとけこんでくるだろう。するとな、一日のつかれも、一日の出来ごとみんなわすれてしまうのだよ、わしはそれが一ばんうれしい。」

源じいさんは口もとに笑いをのこしてころはなしました。

「じゃ、おじいさんはこたつを入れて極樂ならおらあ、つめたい寢床にこたつなしではいると地獄つていうの。」

けん坊はさも不思議そうに枕元に突立ちながらおじいさんをのぞきこむのでした。

「地獄つてか、面白いことをいうな、そのつめたい身體でもしばらくやすんでいると溫くなつて、朝目がさめたときにはいゝ氣持だろう。」

「ふん。」

「そしたらお前だつて朝は極樂さ。」

「なんだい。」

「そうじゃないか。」

「するとおらあの極樂は朝でおじいさんの極樂は夜か、おかしいな。」

二人のはなしはなが／＼つきません。とつぜん源じいさんが。

「こらあ、早くねまきを着ないとかぜをひくぞ、そしたら地獄じゃないか。」

と、注意しているうちに、けん坊は「ハクション」と大きなくしやみをしました。

「ほれみろ、いわんことじゃない。」

と、いわれて、けん坊はねまきを着るとするすると源じいさんのねどこの横のふとんにもぐりこみまし

た。

外には木枯が雨戸をガタコトとゆすつています。

「けん坊、極樂つていうのはな、本當は佛さまがいらしやつてさ、きれいな花が咲いていて、鳥もないているところだと、和尚さまからおらあいつも聞かされているが、そりや死んでからゆくところしいがおらあ、もしも生きているうちに極樂があるなら、お前と二人でこうしてねていて、あたゝかいふとんでくるまつて夢をみりや、佛さまのいらつしやる極樂と同じように思うとるじや。」

「ふうん、おじいさん、おらあも身體中がぽか／＼としてきたよ、おらあも極樂じやのう。」

「そうじやろ、さあやすもう、なんでもその極樂がもしこの世にあつたら、身體も心もすつかりのびのびとして、心がすーつとしたきもちのときはまるでおらあも極樂にいるように思うよ。」

源じいさんはそういいながらもおわりのことばはけん坊に聞きとれないほどかすかになつて、あとはすうすうという寢息だけでした。

「あつ おじいさんはもうやすんだのだな。」

けん坊はそう思いながらおじいさんのなんの心配もなさそうな顔をみると、まるで極樂の佛さまがやすんでいるようにも思えました。

「おらあも極樂へ行こう。」

けん坊は小さいこえでそういうとまたふとんをかぶりました。

十一時の時計がさびしくなっています。

修正會

——北國のお寺の正月——

佐藤密雄

(一)

私は北陸の高岡の寺で育つたが、少年のころ元旦から三日間の、早曉の言はば修正會の讀經の長いのには閉口した。小學校二年生の時に眞岸密運と言ふ老僧のもとに引取られたが、覚えが悪かつたのか小學校を出る頃迄お經は餘り習はず従つてきゝ覚え以外はよく讀めなかつた。然し、正月三日間は、將來僧侶たるものと言ふ理由で、修正會の讀經の會座には坐らせられるのである。佛法隆盛の地であるから、讀經は出來なくとも、僧の座に坐することは、重大な意義があるのであるが、そのやうなことは少年の身に何の考へもなく、今日から考へて左程の時間でもない筈であるのに讀經が長くて閉口し、數時間も坐らされた感があつた。

北陸でも高岡は當時佛法繁盛の地で、元旦の早朝四時に

は、信徒總代級の人々が本堂に參拜して讀經をきいて居るのである。北陸路の正月は根雪の中に迎へるのであつて、雪の中を參拜に来る人達は必ずしも市内の人ばかりではないから、雪の降る中を夜半に家を出る人も多いのではないかと思はれる。

元旦から三日間の早朝の讀經に、お經の讀めない小僧迄も法座に坐らせられるのは、恐らく往年の修正會に一山總出勤したしきたりが今なほつゞいてゐるからと考へられる。雪中の大本堂に數人で讀經するのであるから、冷えて寒い筈であつたが、寒さの記憶はほとんどない。たゞ、佛前の大ローソクのゆらぐ炎を見ながら、妄想をほしきまゝにして、新しい年が開けて行くについての種々な幻想が展開し、とくに空中を自由に飛んで自分のすきな國を見付けに行くやうなことをお經のリズムに乗つて考へていたのをいまでも記憶して居るが、これは恐らく日本に初めて飛行機が飛び初めた頃であつたからだと考へられる。

私の育つた寺は極樂寺と言ふのであつて、南北朝時代の南朝方の宗良親王を開山とする寺で、住職や信徒の説明によると、門の構造から本堂の形式迄が何か格式があるやうに説明されて居たし、正月三日間の讀經や信徒の年賀の仕立にも格別なもののあるやうに言はれていたが、今考へて見るとどの寺も同じやうなものであつたのだらうと思はれる。

たゞ經を讀むのに、一つの經を讀んでは一の祈願又は回向をすると云ふ仕方、阿彌陀佛に初まつて祖師・開山・歴代・壇徒等の回向や家門繁榮の祈願を一々やるのであるから仲々終らないのである。實際はさう澤山あるものではないから、恐らく一時間半か二時間で終つたか、或ひはもつと短かつたかも知れないが、聞き覚えでしか知らぬお經を聞き乍ら、これで終るかと思ふ所を又始められるので、非常に長い讀經と感じたのである。

修正會と言ふのは、今日ではほとんどのお寺の寺院規則では、正月三日間若しくは七日間の早曉の法要のこととなつて居るが、その始りは奈良朝時代に、皇居の中に道場を設けて、正月八日に讀經して皇室の安全と國家の隆盛を祈つたのに始まるのである。

淨土宗の寺院は、徳川幕府時代は特に皇室の安全、幕府の隆盛を祈願せしめられたのである。徳川氏が三河の淨土宗大樹寺の壇徒であつて、その爲めに淨土宗の寺院を殊遇したのであるし、又皇室は、これも徳川氏の宗門であつた爲めか、淨土宗寺院に住職したものに、参内すれば紫衣を與えたのである。紫衣を賜る令狀には「日夕に天皇の長壽と國家の安全を必ず祈るべきこと」が第一項に記されてあるし、徳川氏の優遇には將軍の爲めの同じやうな祈願が要請されて居たのである。そこで、淨土宗の寺はすべて、天皇の爲めに「寶祚延長」と記し、將軍の爲めには「武運長

久」と記して二個の天牌(いはい)を造つて佛前に安置して日夕に祈願をしたのであるが、その祈願の最も厳しゆなものゝが正月に行はれることになり、それが修正會の主體となつたのである。これが淨土宗寺院の修正會の最近の傳統とも言ふべきものである。

(二)

北陸は佛法の地であつて、一般の人達は、お寺の年賀を第一にする。だから元旦の四時頃既に本堂へ参る人があるのである。正月の七日間は古來のしきたりで寺の住職は門外禁足であると言はれるが、これは壇信徒の年賀を受ける爲めに實際上外出不能なのを、開山以來云々と因縁づけたものゝやうである。

お寺には玄關を入ると廣間があつて、大圍爐裡がある。雪中を年賀に來た信徒達が一先づ煖を取つて歡談し合ふ所である。こゝで十人位たまるとグループをなして本堂に参り、本堂に張出された年回繰出し表と言ふものを見て、我が家の先亡者中に今年は年回にあたるものがあるかないかを確める。それからグループで住職對面の間に行つて住職と年賀を交すことになるのである。

對面の間の正月の飾りは、正面が代々の住職が皇室から受けた綸旨(紫衣の許可狀)と宗門からの住職任命書で、住職の坐る所は「ケコ」と言ふ椅子の前で、その前面は黒豆

と炭と昆布の三組の三寶飾りである。この飾の手前から信者達は禮をなし、十念を受けてから、年賀の言葉を出すのであつて、樂々しいやうであるが、雪光に榮えた青疊の上に赤いじゆうたんがあり、これ等の飾物の金銀糸がきりりと結ばれて居るのは、新年を嚴かにするやうで仲々よいものであるし、特に我が寺を由緒ありとして居る信者達はこのやうなことに至極満足なのである。

住職と對面がすむと酒席で、住職に次ぐ長老の僧から酒を受けるが、酒肴には、黒まめのほうちい煮、かんでん、みかん、ごぼうのきんぴら、ぎせい、にんじん等である。酒席の次の間は食事席で、ここは世話人の給仕で食事するが、白飯で、大根の輪切の煮込、揚豆腐、大根なます、黒まめ、豆腐味噌汁等である。

住職は正月三日間は早朝から午後の四時頃迄、はげしい時はほとんど十五分おき位に十人から十五人程のグループの年賀を受けるのであるから相當の重労働である。戦後食糧事情等のこともあつて、それが續いて居るかいけないかは不明であるが、つい戦前迄はこれは行はれていたことである。寺ではこの正月の供養に用ひる酒や食事の料理を暮の數日間を作るのであつて、これが正月をむかへる準備の中の一大仕事である。作られたものは何しろ大量であつて、「はんぞう」と言ふ大たらいの様なものに容れて臺所に假設したたなに並べ置かれ、入用の度びにその量だけ火で煖めて

用ひるのであつてこれは二月始め迄貯藏されたと記憶する。正月に年賀に来る信徒達は、必ずお米を五合乃至一升を手さげ袋のやうな形の布袋に入れて持参し、年賀として金一封を添えて奉納するが、中にはお寺の人数全部に年玉を用意して来る人もある、又この時にお寺の維持金の割當金をも納める。これは割當(かつとう)と呼ばれていたが、お寺の計常費の分擔金のこととて、大正時代で一戸二圓位であつたかと思はれるが相當の負擔額である。信徒はこれを少なきは四分の一戸から多きは二戸半位を納めることになるが、その金額は前年の暮に各戸へ知らせてあるので、その通知を持参して納金するのである。北陸の信徒達には税の令書よりも、このお寺の割當の通知書の方が大切に思はれて居るので、これが「鍋釜賣つても寺のことだけは」と言はしめるのである。通知書には本山義財とか教區課金とかお寺が宗門から課せられるものの名目が印刷してあつたと思ふ。東京のお寺の經濟は盆得正損と言つて、お盆の時はプラスで、正月はマイナスとされるが、北陸の方では正月もプラスと考へられるがどうであらうか。

雪の中では人々は互にあたため合ふ必要があるから、人情は濃やかである。信仰もなすことも素朴であるが、何かあたたかいものがあつて、正月は良いものであつたが、今はどうなつたであらうか。いさゝか郷愁めいたものが湧いて来るのである。(大正大學教授)

宗門人各界展望

— 第一回 —

教 學 界 の 卷

編 輯 部

われわれ日本民族が世界に誇りうるものは

いと思う。

佛教を描いて外にはない。しかも日本佛教の眞髓は淨土教において顯彰されなければならぬ。現代における淨土教徒に與えられた最大の課題は、淨土教をして近代的光を掲げるところにある。近世において、とくに明治の廢佛毀釋のごとき苦難な時代に、ひたむきな情熱を傾けて断えず新しい光を自らの與えられた分野に掲げた多くの先哲がある、その流れは現代に至つて夫々の場において繼承され、見事な實を結んでいる。本誌も機會あるごとに宗門人にして各界における躍進の系譜をたどり業績を讀みて明日の荷手を策勵した

明治の佛教は、神佛分離、廢佛毀釋の歴史

的事件によつて幕をあけ、神佛判然令による神佛分離の方針は、勢のおもむくところ、ついに未曾有の廢佛毀釋の運動へと發展した。

その頃、淨土宗においても反抗と自戒との運動が起きてきたことは勿論であつて、その先達は鶴岡徹定、福田行誠の兩師である。徹定師は明治五年最初の管長となつたが、宗制の改廢によつて辭任、再任いく度か管長職につき、行誠上人も管長についたのは晩年であつたが、生涯一宗の師表であつた。徹定師は「佛教不可斥論」を著して佛教の輕んずべからざる所以を力説する一方、當時の新しい

イデオロギーとして移入されたキリスト教の脅威に對しても、多くの著書によつて防衛に力めた。行誠上人はむしろ教團の内部に向つて自肅反省を求て、この法滅にも等しい廢佛破佛の到來は、僧侶自身の腐敗墮落に因るものであることを説いて、教團の自覺、奮起を促した。兩師とも、他宗の先覺者達と相謀つて、各宗同盟會を組織し正法の擁護と宣揚に努めた功績は特記されなければならない。

行誠上人の入寂は明治廿一年であつて、それに續いて日野靈瑞、野上運海の兩師が就任するが、徹定、行誠の兩師の正法復興の熱意を受けて、當時までに岸上恢嶺、神谷大周、勸息義城、中島勸瑒、大鹿愍成、桑門秀成、黒田眞洞、越智專明の諸師らの青年學僧が各方面に進出しはじめていた。名著「説法惟中策」を残した恢嶺師は四十八歳の若さで、明治十八年に亡くなつたが、神谷大周師は大正九年八十才の壽を保つて西化するまで、教育界に布教界に縦横の活躍を續けて大きな足跡を残した。勸息、中島、大鹿、桑門、黒田の諸師もいずれも長壽を保つて、大正の末年、昭

和の初年まで、一宗の教學を指導した。これら諸巨匠の残した功績は大きいが、そのうち特に記憶せられるべきことは次の世代を荷負う學者を養成したことであり、次の世代に多大の信念的影響を與えたことであらう。もつとも、これら巨匠の學問は、一言にしていえば、いわゆる舊佛教學、舊宗乘學で、傳統的な、一字一句を苟もしない訓詁註釋の學である。余乘では俱舍、唯識、天臺、華嚴等が廣く學修せられ、宗乘は主に神谷、勸息、桑門、黒田の諸師が專攻した。宗乘でも、神谷、黒田師のように行誡上人の學風を受けた達意的な傾向もあつたが、多くは細釋的であり、局所的であつた。こういう學風は、これら巨匠が修學時代の前半を、鎖國封建の世に過しているのが當然のことであるが、この學風が却つて新しい方法による佛敎研究の必要を痛感せしめそれへの情熱をあおることになつたのである。

明治廿年には黒田眞洞師らの首唱によつて學制が改革されて淨土宗本校・支校・普通學校の三組織となつた。舊幕時代には講學は關東十八檀林で行われ、明治になつてからは興

學所或は(勸學所)が置かれ、十二年には東京に東部敎校を、京都に西部敎校を設けて敎師を養成していたのを、二十年になつて、時勢の要求に従つて以上のように改めたのである。本校は初め芝公園に開校され、のちに小石川表町に移され、三十一年には淨土宗高等學院と改稱され、四十年には宗教大學(のちの大正大學)と改稱されたが、こゝが麟兒鳳雛の育成された學集であつた。二十年の九月に本校が開設され、初代の校長は黒田眞洞師であつて、二十三年に三星善願師が代つたがまた三十七年に黒田師が再任して、よく人材の發見と後進の腋導につとめた。大正、昭和の淨土宗、のみならず日本佛敎學界を荷負つている學匠で、多かれ少かれ黒田眞洞師の呼吸のかかつていない人は殆どなく、「黒田さん」といえば明治敎學界の偶像になつてゐる。

本校で育成された人達も大體、二つのグループに分けられる。二十一年に入學した松澤賢定、渡邊海旭、荻原雲來、望月信享の諸先生のグループと、やゝ遅れて入學した椎尾辨匡、矢吹慶輝、大島泰信、笹本戒淨、藤田寛

隨、石塚龍學、大村桂巖の諸先生のグループとは、年月に數年の隔りがあり、學界、敎界、社會における活動も多少異つてゐる。

さて、二十一年に入學した渡邊、荻原、望月の諸先生は二十八年そろつて本校を卒業しいずれも翌年内地留學を命ぜられ、渡邊先生は比較宗敎學、荻原先生は印度佛敎史、望月先生は天臺宗を專攻した。三十三年には荻原先生が最初の海外留學生としてドイツに渡つた。當時新歸朝の高楠順次郎博士は淨土宗本校でも梵本を論じていて荻原先生はその敎授を受けていたので、高楠博士の紹介でストラスブルグ大學のロイマンについて梵語、印度佛敎を學ぶことになつた。

ドイツでは、主として梵文「俱舍論釋」や「菩薩地」の研究を續け、二十八年ドクトル・フィロゾフィエーの學位を得て歸朝した。その後、宗教大學敎頭、芝中學校長、淑徳女學校長等に就任したが教育行政の實務は不得意で大方は短年月で辭して、宗教大學敎授、帝大講師、大正大學梵文學主任敎授等、専ら學窓の人として、印度哲學、梵文學の研究に没頭し、大正十一年(五十四才)に學位を得

た。「印度の佛教」「實習梵語學」「梵文菩薩地」梵和對譯無量壽經阿彌陀經」等の出版は世界の學界に貢獻するところが多かつた。荻原先生と十ヶ月おくれで渡邊海旭先生がドイツに渡つた。荻原先生と同じくロイマンに師事して梵語、パーリ語を學修し、傍ら宗教學、哲學を研鑽した。渡邊先生は江戸ツ子で性格が活達磊落、正法宣揚の氣概が頗る鋭く、すでに二十四、五年頃、境野黃洋、高島米峰、平子鐸嶺らと新佛教徒同志會を組織し、機關紙「新佛教」を刊行して、新佛教の歩むべき道を示した。これは佛教界に生新の氣を導き入れたのであつて、多くの共鳴者を出した。滯獨中も、しばしば寄稿してこの運動を援けた。滯獨中の學績は、密教發達論、孔雀王經の研究、普賢行願讚諸本の比較研究などであつて、翻譯名義大集の書寫などは、多に學界を益している。

渡邊先生は歸京後間、まもなく芝中學校長に就任し、宗教大學、東洋大學教授、大正大學理事長となり、淨土宗執綱を兼ね、大正年間には高楠博士と共に大正新修大藏經の刊行という大事業を達成した。八面六臂の活躍を

續けて、いずれの業も充分なる成果を擧げてゐる。

當時の學風は、傳統的な教權に基く護教の學の毀を破つて、原典から宗教を研究し直しこれを西洋の佛教研究と同一水準に高め、佛教を世界文化の一環として理解しようとしたのであるから、従つて英語、ドイツ語の研究がまず第一歩とされた。明治二十六年シカゴ市に萬國宗教大會が開かれたとき、黒田眞洞師もその評議員に指名され、黒田師の「大乘佛教大意」が贈呈配布された。そしてそれを英譯しようとするのが動機となつて、語學研究は一層その必要を痛感されたのである。望月信亨先生はついに海外に出る機會はなく内地にあつて佛教學、宗乘學を專攻して、傳統佛教の護持につとめた。しかし、その佛教學の研究方法は、舊來の傳統的方法とは違つて、時代的新方法を取り容れて、多分に科學的、實證的であつた。明治二十年代から四十年頃までの仕事は殆んど表面に現れない基礎的な研究で、黒田眞洞師との共編「法然上人全集」(三十九年)「佛教大年表」(四十二年)、佛教大辭典編纂の準備的研究などに打込ん

だ。このうまず撓まざる努力を續けるねばり強さが、遂に佛教大辭典七卷を完成させたのである。この業績は世界學界における不滅の金字塔である。「略述淨土教理史」「淨土教の起源と發達」「淨土教概論」等宗乘學に關する著述もみな價值が高い。

望月先生の學問的方法には、近世の實證主義的合理主義と護教的教權主義との兩面がある。中世の學問研究の方法は、學文(經文を學ぶ)であつたが、近世のそれは學問(學び問う)であつて、ただ教權を信奉することではなくて、實證的に批判し、究尋することである。この兩面が或る時は調和し、或る時は反撥しているように思える。これも亦、時代のしからしむる所であらう。

付記 本篇は佐藤賢順先生より貴重なる文献をいただき編輯したものである。

* * *

——記＝日＝印＝滯＝——

——サンチニケータンにて——



——也＝眞＝井＝日＝春＝——

昭和三十年十二月のはじめ私達はカルカタについた。私達と書くのは一家四名である。小學校二年の男の子と幼稚園の女の子の二人の子供たちをつれて来たのであつた。家族とともにいふので呼んで呉れたのはアジアの詩聖と云はれたタゴール翁の創立になる

サンチニケータンにあるビスバ・ブハラテイ大學からであつた。この大學の總長はネール首相なのであるが、これはインドのどの國立大學でも同じなのであるが、官界の大物が總長を兼ねることになつてゐる。従つて大學自身の行政面は副總長の責任にかかるのである。ここの副總長は東洋學者として世界に名の知られたブラボーダ・チャンドラ・バグチ博士であつた。フランスの碩學シルヴァン・レヴィ博士に従つて日本にも来たことのあるこの學者は、經錄の研究及び梵語雜名の佛譯などの不朽の大著を出版したインドの代表的佛教學者であつた。彼は戰後インドの第一回訪華文化使節として北京に滞在したのち、この副總長に就任したのである。はじめ私への招聘の話があつたのは昭和二十八年東京大學の中村博士を通じてであつたが、この年の暮私は交通事故から腎臓出血を起して行動の自由を失つた。とにかく恢復して多忙を加へて来た自分自身の研究生生活の中に、どうしても一度はインドに出かけねばならぬ必要も生じて來ていたし終に意を決して出かける事になつたのであつた。五、〇〇〇哩の海路そして四十日の旅を重ねて十二月のはじめにここに到着した。そして一月ばかりたつた。昭和三十

十一年一月十九日突如としてバグチ博士が心臟マヒで急逝された。博士は日本より梵・巴・藏・漢の資料による佛教研究の方法論を導入する事を念願、企圖せられたのであつた。私は終に此處に遺言を守る立場に立たされて仕舞つた。このあと半年たつて後任の副總長としてサンカール・ボンス教授がカルカタ大學理學部長の職を捨てて來任された。この人はアインスタイン・ボース統計といふ現在の素粒子論の基礎的計算法を考へだした物理學者である。この人は着任後すぐヨーロッパに旅立ち九月末歸任された。この人によつてこの大學もいろいろの分野に新らしい展開を見せるであらう。この人のヨーロッパへの出發前、懇請されるままに、私はこの大學がインドの第二次五ヶ年計畫の線に沿つて新設する日本學部の部長職に就かざるを得なくなつた。日本人でインド國立大學の部長になるのは私が最初であるという。このサンチニケータンは他の國立大學とは異つて、外國人學生が極めて多い。ヨーロッパは勿論、アフリカ及びアジアなどの十六ヶ國から一〇〇人以上の男女學生が集つてゐる。インド人の學生は各州の選拔學生であつて、女子學生たちが想像していたより多いのに驚ろいた。インドの

良家の娘さんは殆んどみなこの大學に學ぶと云はれている。ここはカルカタから丁度一〇〇哩北にあたる。緯度から云うと臺灣の高雄あたりにあたる。これから滯印一年の記録の中から何かインド精神の理解をたすけそうなことを書いて見たいと思う。

——鳥と牛と猿のこと——

船がインドに近づいて、ガンヂス河のデルタ地帯をフーグリ河に沿つて溯るとカルカタである。河に浅いところがあるというので潮待ちするかも知らないという事であつたが夜半にパイロットを乗せた船は順調に河を溯つて十時ごろ河の中に錨を下した。前に大きなサスペンション式の鐵橋がある。有名なハウラ橋である。それを渡つたところにハウラ驛の正面が赤煉瓦の美しい調和を見せている。空には鳥と禿鷲とが舞つていた。船で晝食をすませ税關の検査や何やかやをすませて夕方上陸した。四十日ぶりに陸の夢を結んだ。十二月の朝が消え残つた月を西天に残したまま未だ明けないうちから、ここではまだ人間世界の動きが始まらぬのに、早くも鳥の世界が目覺めて動き出しているのであつた。全く喧しい聲である。單調な聲ではあるが、而もその高低、強弱、緩急いろいろの組合せ

に雜然と鳴き立てられては全く安眠を續ける譯にも行かなかつた。

牛が街の中を氣儘勝手に歩いている。電車道でも悠々と寝そべつていのである。自動車などは全く何とも思はないで群をなして街中を横行するのである。背中にコブの出來てゐる素晴らしい白牛が居る。それ等の牛は全部牝牛であつた。牡の牛はやはり役牛になつていて車を引いている。この牛車の形がどこかで見た様な氣がしたのであつたが長く思い出せなかつた。或時フト見たモヘンヂョ・ダロの遺跡から發掘されたインダス文明遺品のうちに全く同形式の車があつたのであつた。A字形をした下の四角の部分に荷物をのせた二輪車で、A字形の頂點の西側に二頭の牛を並べてその牛の首の上に車の前半の重さがかけた牛車であつた。西紀前三千五百年を溯り得るこの車の遺品から現代まで六千五百年間ものあいだちつとも變らぬ形式を保存して來ているインド人の根氣強さに驚ろくとともにインド文化の斷面を見出せた様な氣がした。カルカタに二日とまつて入國手續やら何やらかやら用事をすませて子供たちとともに動物園へ行つた。ラングーソンの動物園で蛇の各種を見て來たのであるが、カルカタの動

物園は流石によく整備されているといつてよい。大きな叫び聲が休みなしに思うていたがそれは放し飼いの黒猿の聲であつた。頓狂な顔をした目鏡猿も澤山いた孔雀が大きな羽音を立てて枝から枝に飛んだりした。猿の叫び聲の間に、長くよく響く管樂器の強音が聞えた孔雀の鳴聲であつた。耳なれないこの二つの聲に私はやつと祖國を離れてインドの地に立つてゐるという氣がしたのである。その午後ハウラ驛から汽車に乗つた。發車の時刻からして三十分遅れて出た列車に、電燈もない驛を幾つか過ぎてポールブル驛についた。ここで下車するのである。闇の中を人力車に乗つて三十分もかかつて大學のゲート・ハウスについた。親切に出迎へて呉れた方々の厚意の中に夕食をとつてサンチニケータンの第一夜を過した。ここの朝は素晴らしい。文字通り靜かな(サンチ)村(ニケータン)である。鳥の叫びに代つて雀の囀りであつた。すかり氣持よくなつて目覺めた私は、朝食前の一刻を散歩に出てかへつて見ると、テーブルの上に生けた色とりどりのバラの花が部屋の中にまづ入つて來た雀によつてみんな抜き取られて仕舞つていた。買い整へねばならぬものがあつたので人力

車で街まで出た。大學から二哩である。町の中、の果物屋で買物をして、とすぐ横まで猿が来るのである。鼠色というか灰色というか軽いバステルカラーの毛皮をまとつてと云いたい程のスマートさがある。尾が長い。大體背伸びした手から足先まで位の長さの尾がついている。起居背をまげて踞つてゐるから尾だけ長いのが立つようである。頭は日本の猿と同じ様に見えるが尻の胼胝がない群棲して、いて子猿を哺乳しているものもある。インドの猿はラーマ王物語にも出て来るのであるがハヌーマンという神のお使いであるという事を信じてゐるインド人は決して虐めることはない。しかしそれは猿の社會と人間の社會との關係だけなのであつて猿の社會の中には、嚴しい猿の社會の掟があるらしい。サンチニケータンというところは大學だけのある村であるがそこには森も池もある。けれども猿の群はやつて来てゐないインド人の町であるボールプールの街道に棲みついてゐるだけらしい。この猿どもの社會がインド人の生活様式や言語生活を眞似るほど進化すれば新しいハヌーマンという階級が出来るかも知れないと考へたりした。インドではそれほど人間社會に接近して猿が住んでゐるのである。

——インド人の顔のこと——

日本人はインド人は黒い人間ばかりだと思ひ込み勝ちである。事實私もそう思つてゐた。むかし中學生時代に英會話を受持つてゐたチャンドラ・グプタ先生（現在大阪外語教授）も實際黒い人であつた。しかしインドに来て見ると同じ様な黒一色ではない。インドの烏が日本の烏の様に漆黒なのは少くて、頭と胸は灰色のものが多し、時たま灰白に近いものさへ居るところを見ると白い鳥も居る様に思へる。この烏のバラエティと同じ様にインド人の皮膚の色もちがつてゐる。インドの民族的分類に關する研究はリスレーによる七種類の分類から、ドニケールによる二類八種に分つもの及びハッドソンの白色系、黄色系に分けるジウフリダ・ルツチェリ式分類まで加へて考へて見ても現在までのところでは、まだ學問的に結論まで行つてゐない様である。そのような學問的研究とは別に、してインドの各州からの學生が集つてゐるこのサンチニケータンの大學の學生を見てゐると日本人にそっくりのアッサムの學生が居る。また西洋人よりも白いカシエミールの女子學生が居るかと思うと、本當に美しいはつきりした眼と微笑する口許がなければ前後どちらを向いてい

るのか判らないと云つたほどの黒さの南印度の學生も居る。しかし一様に美しいはつきり見ひらいた大きい眼をもつてゐる。鼻は高く筋の通つたのも低くベツシヤリしたのもある。日本でいま流行の八頭身とか八等身とかの尺度で測定すればこの女子學生たちは、全部バスする様に思はれるほど姿勢が整つていて美人が多い。バストやヒップスはよく發達してゐて、インドの彫刻の通りである。この學内では外國人の女子學生たちでも裸足で歩いてゐて、少しも危いことはない。大幅六ヤールの美しいサリーを上手に身體にまきつけて、日本の佛教で云う偏袒右肩の形をして歩いてゐるインド婦人の姿を見てゐると、インド美術の夢幻の境に遊ぶ様な氣持になつてゐる。これは決して私だけではないであらう。男子學生たちも美しい澄んだ良い眼をしてゐる。口邊には微笑を浮べてゐる。語る人の眼許を見つめて聞き入るこれ等の學生たちの見るかにフレッシュな頭腦の中に新らしく日本文化という沃野を墾してそこにインドに佛教復興という收穫をもたらす行動的情熱を芽生えさせたいという意欲はインドの佛教の現況を見るにつけ知るにつけ次第に私の心の中に強まつて行くのであつた。

——歴史の陰にひろむ問題——

近代インドの最も勝れた指導者の一人であつたガンヂー翁がハリジャン（神の子）と呼んだ人達はインドの階層のうちの最も下賤な人達と云はれる種類のものではあつた。インドの宗教的な民族の聖典とも云うべきヴェダ讃歌のうちでも最も古い時代に出来たと考へられるリグヴェダのうちに入れられているブルシャ讃歌の天地開闢の歌に次の一節がある。

ブルシャは千頭、千眼、千足あり、地界を抱擁してなお十指の幅を餘し、既存・未存の一切である。

諸神が彼を犠牲として祭式を行つたとき、讃歌・歌詠・韻律・祭祀が生じ、また馬・牛・羊・山羊等の一切の畜類が生じ、その口より婆羅門が生じ、その雙腕より王族、その雙眼よりヴァイシャ（農工商階級）、その兩足よりシュートドラ（奴隸階級）が生じた。更に月はその心臓より、日はその眼より、インドラとアグニにはその口より、風神ヴァーユはその呼吸より生じた。またその臍より空界、その頭より天界、よの足より地界、その目より方位が生じたと云う。

これは北歐神話などにも類例のある巨人解體による世界創造神話の一種なのであるが、こ

の中に出て来る婆羅門・王族・ヴァイシャ及びシュートドラの四つがインドの四階級なのである。ハリジャンはこの第四階級の事なのである。インドの佛教はこの階級の解放に働くべきであらう。最近の新聞の報道によつても（昭和三十一年十月十五日ステーション紙）、アンベドカール博士の指導の下に、クシナラに居るインドの最も古い佛教僧侶であるチャンドラ・マニ長老の司會によつて、嚴肅な式を行つた二十萬人ものハリジャンが一擧に佛教徒に改宗したという中印度ナグプール在住の今年佛陀の二千五百年の記念の年に、インドでは斯くの如くして、佛教思想が、かかる分野から浸み込んでゆくのである。私はいまここでインドの佛陀時代の歴史を考へて見ることは容易ではないが、インド全體が歴史上はじめての統一國家として形式せられたマウリヤ王朝を基準として考へることが出来るであらう。マウリヤ王朝の英主アショーカ王は「一切の人は皆これ朕が子なり」という事を本氣で考へた世界最初の王なのであるから、彼の國家に於ては宗教はすべての階級が開放されていたのである。その時代には金で購はれた奴隸（バタ）が居たけれども、彼等の前にも宗教の自由は與へられていた。またギリ

シヤ人で、西曆紀元前三百年ごろ、東インドのマガダ國の首都である華氏城に駐在したシリヤ王の使節メガステネースは當時のインドの七つの階級の事を述べていて、バラモン法典にあらはれる四種の階級の事を述べている。これは今でも尙學界に於て疑問とされている。この四種の區分から現代のインドに數千種の別を生むに至るのである。そしてそのうちの下級になればなるほど宗教に對する自由が大きく束縛される。その階層の種類の名前だけを擧げるのさへたいへんな事であつてバインスの民族學には十頁以上に亘つてこの名を列挙している。これ等の區別が生じる最大の原因は異種族間の結婚、職業の分化などによるのである。ところで此處サンチニケータンにはインド人と外國人の結婚例が多い。しかしその多くの場合はインド人と外國婦人との結婚例が壓倒的に多いのはどうしたことであらうか。ここにインド婦人の家庭内の在り方についての問題があるのであらうか。インド人が歴史の束縛から離れて立ち上る日は何時であらうか。その時にこそその人達の信仰を支える宗教は人間個人の尊嚴を教へる佛教であらうと思うのは私だけではないであらう。（筆者佛教大學教授）

三門について



増上寺にみると、近來寺院に對する關心の有無がよく判る。その中で、どうゆうものか、三門についての質問が壓倒的に多い。

夫れも文化財としてのもんでない、増上寺三門が東京都最古のもんで、關東第一の朱塗りの大樓門と云ふようなものより、或は伏見桃山調の豪快無双な造りと云ふことについてでもない、魚よろや枡組の美事さと云ふもんでもない、只、なんの爲に在るのか知らと云ふものが多い。

羽用空港、東京港の發展について、内外人が多く出入りし門前を通るからかも知れない、又何處からでも日本調の美しい特色のある而も目立つ存在であるからかも知れない。

又はさんもんと云ふ語源が親しめるからかも知れない。

いろ／＼の話のついでに使はれる「三文のねうちもない」と云ふ

村上博了

言葉がある、「つまらんもんだ」とする事である。又朝早起きすると「三文の得がある」と云はれてゐる。三文と云ふことは共に昔の貨幣の「三文」を指してゐる。

三もんは三もんに通ずるから、寺院のさんもんも、云はゞどうでもいいもんかも知れない、どうでもいいもんが巍々とあたりを壓して建つてゐるから、そこに疑問が生ずるのかも知れない。今や所謂道義は退廢し、末世末法の世中だ、佛法滅盡の秋だから、そうゆふもんと云ふ事があるかも知れないが、寺院のさんもんは、永い歴史と傳燈、經典に準據してゐる重要なもんである、言葉のあやのもんでないことが注意されてよい。

二

現代寺院の建物で、第一印象を與へるものは、さんもんである。境内に這入る爲には、どうしても其下を通らなければならぬから計

りではない。

形體上から見ても、人の目につき易い、殊に朱塗りの場合は一層鮮やかである。寺院の結構上から見ても、七堂伽藍の(一)であつて、無くてはならないものとなつてゐる。種別は樓門あり、さん門あり、石門柱もあるが一様に、さん門と呼ばれてゐる。釋氏要覽に

三門とは、只一門であつても、三門と云ふ

としてゐる。たゞ一門で三門と云ふことは、なにか意味がありそうである。殊に三の字に割りきれない無限數の代表でもあるに於ておや

東京芝増上寺、鎌倉光明寺は、古來三門と書いて山門とは書かない。

併し前者は三緑山、後者は天照山と云ふ、山號があり、その一山を共に、山内と稱してゐる、従つて山の字ではなしに三の字を使用してゐることは、重要な意味があるからである。

一般寺院は山門と書いて憚らない、比叡山の如きは、良忍、法然、榮西、親鸞、日蓮等を出して、日本佛教の母胎なりと云はれてゐるけれども、三門とは云はず、山門と稱してゐる。殊に山徒、山門徒と稱しては古來仲々に有名であつた。王朝時代に於てさへ、すご六のさい、鴨河の水、山法師はままならぬと至尊を嘆かしめたので、山法師、山門と呼びなれたからかも知れない、地方町村内の多數寺院も山門と書き山門と稱してゐる。三門と書いては誤りとさへ見られること程、近來は山の字が使用され而もそれに馴れきつてゐる。

三

門と云ふと、文字の示すように「人の出入する所」の出入口を持つ標示又は建造物を指してゐる。敢て寺院計りではない神社在家も結構してゐる。

抑々支院には、山號、寺號、院號とあり、假りにその(一)つを呼んで〇〇寺或は△△院とすることが當節のならはしである、右の三號あるによつて三門と云ふものでもない。

佛說界許摩訶帝經に

善哉智慧人 非惡業能繫

求寂靜修行 證獨覺菩提

とあるように、古來から清淨な寂靜の所にあつて、沙門たる可き者は修行することを建前としてゐるので、人里をはなれた、山地等がその所としてあてられた。例えば大陸では天臺山、廬山等、日本では比叡山高野山等が夫れであつた、その清淨域に出入りする出入口の造りを門と云ひならはしたが、山門とすることは本來の相ではない。然らば何に由つてゐるか云ふに、佛地論に、

大宮殿あり、三解脱門を所入の所となす

としてゐるように、三門と略されたのが正しい呼稱である。

こゝに云ふ大宮殿とは本堂であるが詳しくは法空涅槃と稱す可きか、三解脱門とは、空門、無相門、無作門を指してゐる。

前者の涅槃と云ふは、我空、法空の(一)別の意味があるけれども、如く之をおき、涅槃には有余涅槃、無余涅槃の別がある。有余涅槃

と云ふことは、小乘の見解によれば、「初位より第三位まで」を指し、無余涅槃と云ふことは「第四阿羅漢より無學位」までを指してゐる。

大乘より之を見る時には「小乘を有余涅槃」と云ひ、大乘の「菩薩地或は佛地」を無余涅槃とする。單的に云ふと、寺院の本堂がそれに當るのである。

拘て三解脱門の

1、空門と云ふことは、我相、わがままな妄想心であつて、貧瞋痴に當る。

2、無相門と云ふことは、法相法執を空とすることであつて、云はゞ家庭、學校、社會に於ける環境の次にある第四環境によつて作られる、自己中心の妄想である。無理な相をありの儘すなほに見ること、逆に云ふと、眞如・實相界手前の見解にあたる、それ人の一過程に當る世界の事である。

3、無作門又は無願門と云ふ。釋土を去つて淨土へ發願するもので、作相願求を自身丈とする心があつてはいかぬ、よろず煩惱をすてて菩提をとり、退轉なきを期さなければならぬとする。

要は人間の三毒と云はれる貧瞋痴をとり去る事である。法然上人圓光大師の御法語に、

すべて、もろ／＼の煩惱の、起ることは、みなもと、貧瞋を母として出生するなり。

貧と云ふについて、喜足小欲の貧あり、不喜足大欲の貧あり。今淨土宗に、制するところは不喜足大欲の貧煩惱なり。

まず行者、かやうの道理を心得て、念佛すべきなり。之が眞實の念佛にてあるなり。喜足小欲の貧は苦しからず、瞋煩惱も敬上慈下の心を、破らずして、道理を心得んほどなり。痴煩惱と云ふはおろかなる心なり、この心を賢くなすべきなり。

まづ生死を、いとひ、淨土をねがひて、往生を大事と、いとなみて、諸々の家業を、こととせざれば、痴煩惱なき也。少々の痴は往生のさほりにならず、之ほどに心得つれば、貧瞋等の虚假の心は、失せて、眞實心は、易くおこるなり。これを淨土の菩提心と云ふなり云云

と示されてゐる。

喜足小欲と云ふことは、例へば商店で、日計でよし、月末のしめくくりでよし、もう少し欲しい、少くとも一、二割は欲しいとすること、

農家で收穫が終つて「さなぼり」と稱して、御馳走を作り、佛さま神さまにお供して一家團樂。積み重ねた俵なり、それを賣つた代金なりを眺めて、尙今少しほしいものだ、云はゞ反當りもう一俵位欲しいとすること。

どこの家庭でも、季節の代りに當つて衣替する時に、もう一枚あればよいなとすると、その願望を指すものである。「足れりを知る」ことは、宗祖大師の云はれる、喜足小欲の貧であつて、このような貧ならば、往生のさほりとはならない。

本宗では、けたはずれた、不喜足大欲は、よくない而もその煩惱は殊にいけなとする。

煩惱も、目上の人を敬ひ、目下の立場の人を慈しみ、ものの道理を心得てゐる度合ならばよい、瞋とは「しつと」すること「ねたむ」ことであつて、飾る心と表裏一體となるものである。

「しつと」する事も、形の上や、言葉の上に、よく出るようであつては、いかぬとする事である。

「しつと」が強くなると我儘となり、人間でないようになる怖れが出来る、同時に飾る心が強くなり、いろ／＼の不道德や犯罪の母胎ともなる。

而して社會生活を破り、人生の不幸をきたす事となる、従つて、宗祖大師の仰せられる、もろ／＼の煩惱は、貧瞋を母胎として出来るものであるから充分注意すべきである。

痴煩惱と云ふことは「おろかなる心」であつて、教養によつて、或は愚なると悟ることによつて、又は眞心から事に當る時に始めて正しい信仰即ち念佛生活となる譯である。

この貧瞋痴の三毒を「とり去る」から、三門と云ふのである。

寺院の三門を見る時、自然に清風が吹き始め、心さわやかになり三門をくぐると菩提心を生ずるための門である。

學道用心集には、

- 一、自身のために、佛法を修すべからず
 - 二、名利のために、佛法を修すべからず
 - 三、果報を得んために、佛法を修すべからず
 - 四、靈驗を得んがために、佛法を修すべからず
- と、四ヶ條を擧げて、その心構を教へてゐる、而も「佛法の爲には佛

法を修す、乃ち提道なり」としてゐる。この無我の慈悲こそ——佛の大慈悲である。宗祖大師の仰せられる至誠心であり、眞實心である。至誠心と云ふは、大師（法然上人）釋して宜はく、
至と言ふは、眞なり。誠と云ふは實なりと云へり。
たゞ眞實心を至誠心と善導は仰せられたるなり。
眞實と云ふは、もろ／＼の虚假の心のなきを言なり。虚假と云ふは、貧瞋等の煩惱を起して、正念を失ふを虚假心と釋するなり。
と説かれてゐる。

大慈悲心は、眞實心を母として初めて起る、偽りのなき心の作用の表現である。

是こそ佛教徒の志すところであつて、近來新興宗教と云はれるものが、右の事理によつて見る時、果して佛法か否か一目明了なものがあらう。又宗教とした場合には、どこか、なにか不足してゐることに氣付かれるであらう。

四

三門は黒い色の場合に、俗に黒門、赤い朱塗りの場合には、俗に赤門とも呼ばれる。

參道入口の場合は大門とも云はれ、その位次によつては、中の門又は二の門、三の門とも、呼稱されることがあるけれども、三門と云ふことが正しい呼び方であり、正しい書き方である、寺院に無くしてはならないものであるし、生活の物心兩面の福祉を志す者に、なくてはならぬ木鐸でもある。（増上寺文化財部）

ホノルル通信

第七信

ホノルル浄土宗別院にて

松 壽 弘 道

前回では日本の家屋構造の個性に及ぼした影響について、大分悲觀的な結論に到達しましたが、最近の近代建築に日本の建築方式が大幅に取り入れられている現象と照らし合わせて、それでは辻褃が合わないではないかと疑問に思われる方も居るのではないかと考えますので、この點について一寸附記しておきます。確かに日本の建築方式が近代の西洋建築に採用されているのは事實であり、その窓を廣くとする事によつて採光及び通風に便ならしめる日本の襖、障子の構造は世界の建築學界に旋風を卷おこしました。しかし、この傾向を以つて一概に日本建築の優秀性を説き全部が全部、現代の趣向にマッチしていると獨斷するのは少し早見の様です。如何に日本スタイルを模倣、採用したからといつて必ずしも家の隅々までそれを取り入れた譯でなく、只夏の炎暑を避ける爲に、氣樂さと適當なエキゾチズム(異國情調)を味わう爲に採用したまでの話なしです。ですから、この窓を廣くとり、部屋と部屋との壁を障子に入れ換えたといつてもそれは居間及び客間だけのことで、寢室、書齋、洗面所、浴室は依然

として獨立しており、完全に他の部屋と隔離されています。日本では、その點、獨立した個室が存在せず寢室さえし指穴一つで覗かれる有様では、經濟的乃至其の他の理由があるにせよ私生活の確立及び獨立感を阻害している事是否めない事實です。この個室の不完備は家族及び他人に對して常に氣兼ねと遠慮を餘儀なくし、自由潤達な私生活を壓迫し、特に夫婦間に於ける圓滿さも暗黙のうちに妨害して來たのではありやまいかと考えるのです。こちではこの個室の確立と相俟つて、自動車の普及も個性に對して大なる影響を與えた事を見逃せません。何時、何處へでも、誰への氣兼ねもなく外出し、思う存分の生活を享受する事が出來ます。これが性道德の類廢を招いた事も事實ですが、自由な生活と個性を植付けるのに大なる役割を達して來ました。最近、谷崎潤一郎さんが中央公論誌上で發表した「鍵」が、日本では大分、問題となつている様ですが、著者のこの少説を書かれた意圖も何か、個室の獨立を叫んで反抗する夫婦の姿を鍵に例えた様な氣がしてなりせま

こう考えて来ますと、個室の確立は獨立自尊の精神を養成するのに不可缺の要素となつて來た事はうなづける事と思います。

日本人の個性を歪めた原因を主として家屋構造の面より考察して參りましたが、これを翻つて、日本の言葉の上から個性抹殺の原因を溯つてみましょう。その手近な方法として

日本語の構造を西洋の、特に英語の言語構造と對比させつゝ考えてみるに、日本語の特徴は次の四項目に一應分類する事が出來ます

(1)肯定及び否定の不明瞭性、(2)人稱の不確定性、(3)單復兩數の漠然性、(4)敬語法の獨自的存在。

まず第一の「肯定及び否定の不明瞭性」について、日本語では質問に對する返答が西洋語と全然一反對になる事があります。例えば日本語では「あなたは彼を知つていませんか?」という問に對して「はい、知りません」と答えますが、英語では「Don't You Know Him?」という質問に對しては「いゝえ」「No, I don't」と答えます。この場合、日本語の「はい」は言葉の内容に對する返答でなく、相手の質問を認知し、尊重する同調沒我

の答なのです。これに對して西洋語では、あくまで否定は否定として「ノー」で押し通します。

第二の「人稱の不確定性」については、日本語は人稱を屢々省略する事によつて誰が云つてゐるのか、その話の當事者になつてみないとならない場合があります。例えば「行きませんか?」「うん行こう」等、これには貴方とか私とかという人稱を表現せずして暗目のうちに了解が成立するという、話をする當事者たる人間を殺して言葉を話す方法が日本語では用いられます。

第三の單復兩數の漠然性について、日本語には一般的な復數形が存在しない點です。日本語の「國々」「島々」というのは嚴密なる意味での復數ではなくして、各々の國という。

即ち英語でいう *each* か或は *certain* の意味に當ります。「ら」「たち」「ども」という接尾語もかならずしも復數形を作るとは限りません。第四の敬語法の獨自的存在については、一般西洋では、私の知つてゐる範圍では挨拶及び應對の言葉が簡單です。日本では特に親子、主従の關係に於て言葉の使い方

が丁寧になり、西洋にはみられぬ複雑多様な人稱代名詞及び敬語法が發達しました。人稱代名詞である「ユー」の一字に對して日本語

では「貴方、貴様、貴殿、そち、あんた、てめえ、汝、おのれ」等と複雑多様な事をみてもうなづけるでしょう。日本語以外の言葉では尊敬の意味を表わすのに特殊な表現形式を用い或は三人稱を用いる事によつて敬意を表しますが、日本語では、言葉の使い方によつて尊稱か卑稱かが明確に區別されます。ですから目上の人、對等の人、目下の人、親しい人、疎遠なる人に對し自ら用いる人稱代名詞と語法が異つていて、この秩序が無意識のうちに日本人の心の中に植付けられ、しいては言語手段に於て、對稱者に適應する多様性の言語を用意し、個性を異つた形で表現せねばならなくなつてゐるのです。

こうして考えてみると、日本人が日常使う言葉に於いてすら對象を客體的なものとして把握しないで、或は又、自分を獨立の行爲主體としての人格として意識しないで、人間關係に於て位置づけしようとしてゐる日本人の特殊的存在が言語學的にみても容易にうなづける事が出来るのです。では今日はこれ迄、皆さん御氣遣よう。



凡人のための教え

佐藤賢順

今晚から五回に涉つて觀無量壽經のお話をいたしますが

このお經は淨土三部教の一として、中世以來、わが國の精神生活に廣く深い影響を與えてきたお經であります。三部經といえますと、法華の三部經、鎮護國家の三部經などといろいろの三部經がありますが、淨土の三部經といひますのは、無量壽經、觀無量壽經、阿彌陀經の三つをいうであります。これを淨土の三部經と定めたのは、日本淨土教の開祖、法然上人であります。法然上人はこのお經を「正しく往生淨土を明らかにした教え」として、三部經の一つに選んだのであります。

(25)
これを今のような形の漢文に翻譯したのは、西曆五世紀

の半ば頃、シナの南北朝の宋の時代のこうもやじや晁良耶舎という人でした。晁良耶舎は西域、今のトルキスタンの人で、西域から來て宋の太祖の被護を受けて、いくつかのお經を漢譯しております。このお經は無量壽經、阿彌陀經に比べると、一番新らしい翻譯で、無量壽經の今の形のものは、すでに三世紀の半ばに漢譯されております。

このお經がいかに重く見られていたか、ということとは、註釋書、解説書が昔から實に澤山出ているのを見ましても大凡は見當がつくので、シナでは六世紀の中頃に、淨影寺慧遠や天台智顗の註譯書が書かれ、それ以來、七世紀の終り頃までに、凡そ十種類の註釋解説が書かれております。

わが國でも勿論、平安朝の中頃から解説書が現れておりまして、その數も相當に登つております。そしてこういう解説書は、それぞれ解説する人の主観、立場が異なるに従つて内容もまちまちで、それらが思想史の上で占めている比重も、そう重いとは申せません。この經の眞の意味を最もよく抱えて、まだ誰も氣付かなかつた重要な點を取り出して説いたのは、シナの唐の時代（七世紀）の善導大師であります。善導は新鮮な時代感覺を持ち、眞實の自己の追及によつてそれまでの陳腐な見方とは違つた人間解釋をした人でした。彼はその時代を意識し人間の眞實の姿を見つめるのに、獨特の鋭さを持つていたばかりでなく、藝術的、造形的な才能にも恵まれていた、佛や佛の國を歎^たえる禮讃歌を澤山作つた詩人でもあり、傳えるところによりますと、觀無量壽經に説かれてある極樂の世界を、美しい繪畫に描いた畫家でもあつたということでした。この人が時代と人間の眞の姿とをほんとうに見極めて、その感覺から、觀經（觀無量壽經は普通に省略して觀經と呼ぶこともあります）を解釋したのが善導の「觀無量壽經の疏」であります。疏とは註釋書の意味です。法然上人は専らこれによつて淨土教を開いたのでありまして、この疏が法然、親鸞等の日本

淨土教に與えた影響は誠に大きいものであります。これからの私のお話も、この解説書によつていこうと思ひます

觀無量壽經は詳しくいえば觀無量壽佛經というべきであります。無量壽佛は阿彌陀佛のことでありますから、阿彌陀佛とその國土である西方極樂世界を觀想することを説いたお經であります。觀とは觀想、觀察、觀念することでありまして、この經に書いてあるままの佛の姿や極樂の有様を、眼を閉ぢている時でも、開いている時でも同じようになりありと目の前に見られるようになるまで修練する方法を説いたのであります。

釋尊がこのようなお教えを説かれた因縁となつたのは、當時、マカダ國の王舍城に起つた悲劇であります。この王舍城の悲劇については、明晩お話をいたしますが、マカダ國の頻婆沙羅王^{びんばさらか}の王妃韋提希^{いだいけ}がその息子の阿闍世^{あじやせ}に叛かれて、夫も、自分も幽閉されて殺されそうになつていゝといふ悲しみと悩みのどん底に落ちていゝとき、釋尊に訴えて救いを求めた、釋尊はこれに應えて、韋提希をこの現實苦から救済してやる道を説かれた、その救済の教えがこの經典の内容全體をなしている、という構想で書かれていゝの

であります。ですから王舍城の歴史的悲劇の物語の展開につれて、お経の内容も展開していくという仕組で話が進められていくので、お経としては余り例の少い構成でありまして、この點が他のお経に比べて文學的な感興をそそる所であります。

しかもここに描かれている韋提希は、當時の大國であるマカダ國の王妃というような特別の階級にある高貴な人としてではなくて、惡逆無道な息子に叛かれて苦しみ悩む一個の平凡な女性として、つねに私どもがあつちでもこつちでも見慣れているような、妻であり母であるありふれた一女性として描かれているのであります。この平凡な一女性の悩みに對して釋尊が救済の法を説かれる、その教えはいろいろと説かれたけれども、最後には、名號を附屬する、すなわち心から阿彌陀佛の救いを信じて南無阿彌陀佛を稱よと説かれる、それによつて人生苦に沈倫するこの一女性が救済されるというのであります。韋提希が救われたばかりではなく、五百人の侍女たちも悟りを求める心を起して、信仰の世界に生きることと願つたということでもあります。平凡な妻であり母である一女性のための教えであという點で、この經典は現代に再び取り上げられなければならない

のであります。

それでは釋尊が韋提希に説いた教えの内容とは、どのようなことであつたでしょうか。人生苦のどん底に沈んで悩み苦しむ韋提希が、この苦しみの現實界から抜け出て、理想の世界、憧憬の國に生れたいと願つて、釋尊に教えを求めたのでありますが、釋尊はこれに對して如何なる道を示されたのでしょうか。釋尊は、「汝、知るやいなや、阿彌陀佛ここを去ること遠からず。汝まさに念をかけて、諦かにかの國を觀すへし。」といひます。そしてそれから教えを説くのでありますが、それは三福と定善十三觀と散善九品と名號との四つの部分に分けられます。

餘り細かく教理の内容に立入ることは控えますが、どうしても必要なことだけは、ほんの輪廓だけでも眺めておかなければなりませんので、まず三福とはいかなる教えであるかをお話しましょう。釋尊は、「かの國に生ぜんと欲するものはまさに三福を修すべし。」といつて三福を説くのであります。三福とは第一に世福すなわち世間的な道德的な行爲で、父母に孝養を盡すとか、師長を敬うとか、その他生き物を殺さないとか盗みをしないとかいふような一般の人と人との間の善行を指すのであります。第二には戒福、

これは出家として定められた戒律たいりつを持ち、決してこれを犯さないという善業です。前の世福が人と人との間の福德であるとするれば、これは自分が自分に對して行う善行であつて、世福よりは宗教的であります。第三には行福ぎょうふく、これは宗教的な實踐の徳を積んでいくことで、戒福よりはもつと超世俗的でしかも積極的になります。菩提心を發はつすとか、因果を深く信ずるとか、大乘經典を讀むとか、人を勧めて佛道に入らしめるとかいう行いであります。この世福・戒福・行福の三つが三福で、釋尊はまずこれを説かれたのであります。しかし一應、三福は説いたのですが、それを委まかしく説くことは、暫く止めて、次に定善の十三觀を説きます。定善というのは座禪でもやるときのように、靜かに心を落ちつけて、その靜かな心で行う善業のことです。況や風の靜まつた鏡のような水面に美しい周圍の風景を寫すように、次ぎ次ぎに湧き起つてくる妄想を拭い捨てて、靜かに落ちついた心のうへに、佛の姿や極樂の有様を寫すことあります。それに十三の順序があるので、定善十三觀というのです。それについては、のちに委しくお話ししますが、實はこういうように心を靜めて極樂の姿を觀するという觀想は、非常に難かしいことで、その初めの日想觀と

いつて太陽の沈む形を觀想するということでもさへも容易にできることではありません。私どもの心は、風車のようにクルクル廻つていて、自分の商賣の事を考えているかと思えば、すぐその次の瞬間には他人に頼まれた仕事のことを考えている、そうかと思うとそれと同時にまた、晝食に何を食べようかなど、考えているというふうで、少しも靜かになるということはないのです。釋尊は定善というような觀想が一般の人間に不可能であることを知つておられたので、次に散善を説くのであります。散善は平常の散亂した心、日常の生活のまゝで行う善き行爲のことです。この教えが散善九品であります。そして最後にその散善のなかから特に名號、南無阿彌陀佛をとり出してこれこそ難しい修行のできぬ平凡人のための教えであると説くのであります。この名號は釋尊が觀無量壽經を説かれた究極の目的で、最後に、「汝ことばよくこの語ことばを持て。この語を持てとは：無量壽佛のみ名を持てというなり」と結んでおります。觀經は大凡そ以上のように構成されております。(大正大學教授)

(NHKより十一月十九日より五日間に涉り放送した講話の要旨)

會員だより

南無阿彌陀佛

諸先生様には浄土編集に御苦勞下さつて有難とう御座居ます。

私は唯今療養生活をいたしております身で御座居ますか。先日、浄土宗の住職から「浄土」を送つて下さいました。毎日、五尺の床に横たへる中に、阿彌陀様にいだかれる身を喜び、御飯をいたゞくにも、御藥をいたゞくにも、南無阿彌陀佛申す身にさしてゐたゞきました。自分にもこんな宿善があつたのかと大變喜んでおります。諸先生様には御多忙中の所、おそれ入りますが、同封の金五百圓也一ヶ年の誌代をお送りいたします故、浄土誌をお送り下さいませ。何分、私は生活保護にて入院してゐますので多くさん鑽仰會への志を出来きませんがはなはだずかしいので御座居ますが、一文字でも結構な御法語にせつしられたら喜しく思ひます余りの百圓は浄土誌の爲に使つて下さいませ。

南無阿彌陀佛

では失禮致します。毎日たのしみに浄土誌をお待ちしております、氣候の變目です故

諸先生様におかれましては十分御身御自愛下さいませ。

南無阿彌陀佛

和歌山縣海草郡野上町小畑

野上厚生病院七棟十八號

西口正夫

鑽仰會諸先生

前略 いつぞや「輪回歌」とか申して御掲載して頂いた次の事について、私の「心境」とでも申すことを左に申し上げます。その歌詞は？次の通り假名「四十八字」のものでした。

われらおちゐていそめしは
さけなんむねのやすくある
こよひたまきえほるふとも
をかへにうせぬゆりゑみつ

以上の通り「假名づかひ」や字の順序は絶対に變へぬことを必室とするものですが、此詞句を、昨年十一月三日（文化の日）に作成したということにして、文部省にある「著作年月日登録」を該省に申請致し、登録税金百三十圓收めて認可になりました。此の詞藻の完全に此通り決定する迄には凡そ、

推敲五十年以上費やしました。そして、會で「淨き友の會」にも加入し増上寺にも數年間出入て居つた時も實は此の詞句に非常に血道をあげていた際でもありました、私は生來非常に煩悶？する方でありまして、何かその血路を開かないうちは、極端に内省し殆どいわゆるノイローゼ？以上に迷い？。そのため年少から歌にふけり、益々そのためばげしく悩みました。そして「あきらめの旅ではあつた磯の先の白い灯臺に日ばさしてゐた」という國語發想の短歌を巻頭に載せた「土にかえれ」というローマ字書き歌集を出し今に至つております。

そういうわけで大戦中は（此の際は鈴木内閣成立の日は増上寺の本堂で椎尾辯匡先生と中村辯康先生と一諸に居つた時でありました）同時に行つて居つたわけはじつはいくさが恐さのあまり、同時に逃避していたわけでありました。免も角そういうわけですが、私は戦争はおはりました、私はいくらはんもんしても、どうやら戦争も終つたわけです、この過去の作詞（中にも四十八字歌）を以つて幾分でもぼくの、その内観？をもつて、社會に報じて何とか、同じ

くなやむ人たちにうれいをわかちたい氣持が最近生じて來ましたので「假名輪回」に「新しいろは歌」というとなえ方を與たようなわけでありまして。つまり、詞句そのまゝをただ發表したばかりでは單に私だけの觀念だけだというわけになるわけで、内容に、今云つたような意味が、あまりに無關係だからであります。内容の主觀性は、御判斷におまかせいたします。私個人としては、いわゆる、心のふるさと、又は卿愁のつもり乃至象徵（しんぼる）ともいゝましようか。新しいろは歌としたのは、從來のもののように、別に主觀的にみずに、かな四十八字を一般大衆のものとして讀んでみられる所に私の社會的奉仕があるわけでありまして。萬一曲譜等をつけるならば内容に寧ろ關係遠くして一般的にしてほしいと存じて居ります。以上

東京都杉並區天沼二の三一九
和日庵 鳴海 要吉

×

×

×

×

呈蓮寺春秋



兒平遂旺

願我身淨如香爐 願我心如知慧火

念念焚燒戒定香 供養十方三世佛

長い間、探し求めていた、心の糧というか
寄り添う事の出来るものが、案外身近なところ
に在ったのに私は驚いた。そうして瞳を見
張った。諸々の修養會、色々の新興宗教にも
舊宗教にも、どんなに勵められても、誘われ
ても、見向きもしなかつた。吞氣な、無味乾
燥みたいな私の心は、絶えず何かを追ひ、求
めていた。遂に、焦燥し悶えて神経の昂ぶる
事が度々あつた。こんな時には定つて血壓が
あがつた。

この探しあぐみ、求め抜いたものを、昨年
四月、遂に最も身近に看出し、之を掴むこと
が出来たのであつた。

お寺詣り……と、念佛を唱えることであつ
た。

全く、平凡と云えば平凡であり、日常の茶
飯事であると云えば、それも然りである。

上田市新田浄土宗の名刹呈蓮寺に、住持の
徳の高い横田浄音師を圍んで蓮友會という集
りが毎朝行われている。朝六時迄に本堂に集
合、浄土宗のお勤めの讀經を済ませ和尚さん
の指導のもとに、ラジオ體操を行い、終了後

は各自獨特の體操、背中を疊につけて、手足
をブル／＼と振る者、肱立伏せをする者、仰
向けて足の先きを伸ばして頭に近い疊に付け
る者、ゴロ／＼轉がる者、この各自勝手に行
う體操は効果があつて、齡を忘れ老衰を防ぎ
血壓の硬化を予防するに非常に役立つよう
である。この運動を永年續けている、六十四歳
の長老、横關衛三氏は、手足の血色若者を凌
ぎ、身體の軟き事、鰯魚の如く、禿頭愈々艶
を増す壯健振りである。

お寺で體操をするようになって食事が美味
くなつた。風邪を引かなくて丈夫になつた……
と云う人が多くなつた。

體操が終ると線香を持つて墓地へお詣りに
出る。お墓のない者は、墓地の入口の無縁佛
をお詣りする。お寺は私の實家の菩提寺であ
るから、祖父母、父母、兄弟と、合掌する多
くの墓石が並んでいると共に、現在の家の墓
地があつて、其處に、長峯古町の西蓮寺から
分骨された母が靜かに眠っている。

朝の霧無縁佛をまず濡らし
線香を持つて本堂を降りた私は、弘化の善
光寺平の地震で亡くなつた人達を弔らつた石

碑と、無縁佛に念佛を唱えて合掌する。整然と並んだ墓石の間を通つて北へ進み、小石を積んだ母の墓へお詣りする。六疊敷ある墓地を先年玉椿で囲んだが、その椿が日毎に大きくなるように思われて楽しい。周圍に立派な墓石が立並んでいるので、少しも早く人並の墓石を建て、法要をしたい……これが目下の私の非願である。

呈蓮寺の墓地を歩く事は楽しいことだ。淨らに掃かれた中に墓碑が劃然と並び、大枝、小枝が縦横に綾なして地上に影を落す徑を、お念佛を唱えて墓を巡ぐる日課は、長くつゞけたいものだ。

春しぐれ母に告ぐべきこと多く

朝月の残る銀杏に掠鳥こもる

夾涼や墓地清淨と掃かれをり

墓參を済ませた人から書院でお茶を載く此頃は、茶碗の数が多くなり、時には庫裡まで茶碗を借りに行くこともある。核を取除いてしつとり砂糖のしみた梅漬は何んとも云われない味があつて、箸で挟んで掌に享けるこの梅漬は、今日一日の健康の素である。

お茶を呑みながら、雑談にふけるが、巷に

起つた問題、政治の話、宗教の話、修養の話などの話の一片を探つても、心身の血となり肉となつて、明日の心の糧となるものである。

寺には以前より、表書きは増上寺椎尾大僧正御執筆の日拜録があつて、南無阿彌陀佛……と書いた下に、氏名を記すが、長く參堂されて居る人達は流石に字體も整い、輕妙に立派に字が居据つているので、後からの人達も机に向い字を習つて記帳する。

六十の手習で、いろはから始めた老人も居る。習いとは、おそろしいもので、毎朝僅かの記帳でもだん／＼に整つて、字が落付いてくる。花岡數幸、横關衛三の兩氏は二十余年の參堂とはいへ、ゆるがぬ字配りと、立派な据りをみせて、筆頭鮮かなものである。和尚さんの字は、誠におだやかにして氣品あり、腹よかな裡にもしつとりした重みをみせている。墓石にも、よく書かれるが、心ほの／＼として有難い字體である。

一通りのお茶を頂戴した頃、椎尾辨匡先生の著、共生讀本の一節を登で讀む、先生の高邁博學な知識を傾けて記述され、然も佛語が多いので、中々むづかしく、眞意を把握する

に困難であるが、和尚さんと、花岡さんが、丁寧に解釋して下さるので皆納得する。戦前の著書ではあるが、現在讀み傾聴して、少しの疑點なく、啓蒙される立派な本である。この本一巻が讀み了つても講讀は幾度も繰り返えされる。坐右の銘としては是非備えたい良本だが惜しくも絶本になつてゐる。

この讀合せが終るとボツ／＼歸る人があるが、所用の人は残つて和尚さんに相談する。和尚さんは寺の住職であると共に、社會教化事業、福祉事業、輔導事業、保育園の育成等數多くの仕事に關係される多忙な身であるが悩む者、困る者のよき相談相手として、人々を善導される。

私は、寺へ通うようになつて、教えられるもの多く、得るところも亦多大であるが、未だ實行の伴わざるものも亦多く、慚愧に耐えない。

佛に仕へて禮拜するのに

第一は、心であり

第二は、清めた香爐に香を焚き、花を添えることであり、

第三は、食物を供えることである、

と、私なりに受取つてゐる。

佛の好きな食物を供えて能事終れり……とする事は第三である。線香やマツチの棒で埋つて、線香もよく立たない香爐に、無理に線香を立て、禮拜していた私は、願我心淨如香爐の意味を悟つて、思わず、はッとして毎朝のように香爐を清める事を覺えた。

又、佛に仕えることは、本堂や佛壇の阿彌陀如來を禮拜する事ばかりでなく、佛は我が心に在り、佛と共に日に生く……と悟されて佛に頼ることは我が心に頼ることであつて、行住坐臥常に佛と共に在る事も知つた。

宗教は、反省であり、研究であるとも教えられた。

菩提も、往生も南無阿彌陀佛の意味も解れば、軽く唱えることが出来る。母が口癖に念佛を唱えたのも、今漸く判る氣がする。

或る時、私は和尚さんにお訊きした。

「皆さんと並んで一所にお念佛を唱えて、木魚を叩いて居りますが、皆さんのように無念無想にはなれません。私には家庭の問題や、營業の心配、手形の苦勞などあつて心が亂れ木魚の音も揃いませんが……」と。

和尚さんは靜に笑をふくんで私に悟された

「家の心配があれば、心配しながら木魚を叩きなさい。手形の苦勞があれば、その苦勞を思いながら木魚を叩きなさい。何事も心配や、思いを流してお念佛を唱えなさい。何時かは無念無想の境地に入られます。

私は小踊りして喜んだ。心配事を、心配するな……と云われても、これは無理だ。苦勞を、苦勞と思うな……これも忘れられない。ところが、心配があつたら、それを心配しながら、木魚を叩いてお念佛しなさい……こんな樂なことはない。私は氣輕に近づく手形の心配を思いながらお念佛を唱えた。肩の重いしこりも取れて、晴々と木魚が鳴り、時には大勢のお念佛の聲が、消えて、私一人のお念佛が高らかに聞えるようになつた。流す……とは忘れまい……とする事でなくして、心配事の中に飛び込みこれと同化して、何時の間にか心配事を失くすることである。と私なりに解釋した。面白いことに、私より遅く參堂した人も次の人も、その又次の人もというように必ず、

「和尚たん、私には心配があつて皆さんのよ

うに、念佛一途には参りませんが……」に、憂げに訊いたり、想つたりするが、「流す」意味を諒解すると共に、何時の間にか、聲高らかに念佛を唱えるようになる。

お寺には以前からの日拜録が澤山ある。それから拜見すると、戦前も、戦争中も、戦後ともいうように、數多くの人達が、お寺へ來られたことが判る。知名の人も随分多い。然し一年と續く人は少いようだ。人それだけの理由で止められるのだろうか、續ける……という事は、むづかしいが、大切な事だ。

「こんなに立派な、良い修養會を、どうして今まで知らなかつたんだろう。毎日續ける……」と聲を大にして、連友會の存在を稱賛する人は、纏て來なくなる人である……と和尚さんは話されたが、地道に、ポツリ……と、絶え間なく參堂する人は永續性が強い。けれど、和尚さんも、私達も、參堂を強はしない。又去るも拒まない。たゞ、現在の十數人の仲間には續きそうな氣がする。幾人かは、臨終の夕まで、蓮の臺うすなに乗るまでは……と強い決心を持つてゐる。

編輯後記

○新年おめでとうございます。

一夜明けて元旦を迎えると、すべての事象に新鮮さを感じる。古えより新年を「あらたま」とも呼んでいる。新しい魂のことである。

新年を迎えると共に、濁り汚がれている魂を浄化し清らかな新しい魂に甦みがえらせることである。

○本誌も今年は廿三周年を迎えた誇り高き傳統を支えとして生々としてヤク動する浄土にリバイバルするよう努力したい。

○本誌巻頭の年頭の所懐は、推尾大僧正より頂戴した。八十餘才の老軀いよ／＼カクシャクとして席暖まる暇なく東に西にみのりを説かれる姿は洵に敬服の極みである。又、昨年末、佛教界はじめての紫綬褒章を授章されたことは喜ばしい。最近眼が御不自由のため自身原稿はお書きにならないのにも拘らず、自の筆にて玉稿を寄せられたことは編輯部を深く感激させている。

○本誌も諸先生の玉稿により多彩に飾ることができたことは嬉しい。

星蓮寺春秋の兒平隆旺氏は本會々員で横内淨音師のよき導きを得て念佛に生きる篤信家である。體驗を通しての文章は讀むものの心を打つものがある。

○今度、眞野正順、佐藤密雄兩先生共著、無量壽經講話（現代聖典講座、河出書房刊 價一五〇圓）が刊行された仲々の好著、必讀されるようおすすめる。（宮林）

○時計の針が十二時を指し、除夜の鐘の響きと共に不斷の時の流れの中で一月一日の幕が開かれた。ゲートはその著、「ファースト」の中で「新なる日が新なる岸へ已を呼ぶ」と云っているが、正月というものは、我々日本人に、その事を一層強く感じさせる。編輯子も心機一新して皆様の御支援を充分頂けるよう努力いたします。

○その意味も加へて本誌本年度の計畫は、昨年NKH「人生讀本」の時間に放送された佐藤賢順先生の觀無量壽經講話を順次連載いたします。信仰誌としての本領に立つて、眞に生活苦惱の中から、經典に信仰の源泉を汲みとりたい意向からです。

○宗門人各界展望は、教學の姿より回を追つて参ります。

○次號三月よりは、各グループを對稱に、説教講話を働く人々への爲への特集（執筆者は、戸松學瑛、各部編輯、後編眞雄の各師）より掲載いたします。

○その他各號先に云つたように信仰誌としての本領に立つて歩んで参りたい所存です。御期待下さい。

○本年も表紙の繪は、青龍社、社人結城天童畫伯の御好意でかざる事が出来た。畫伯に謝意を表しながら、記した。

○年頭、最良の年を願いながら

（水谷）

會費（誌代）

半年二〇〇圓・一年四〇〇圓です。前金切の節は、精算通知を致しますから、折返し御送金下さい。御送金は便利で安全確實な振替を利用して下さい、千圓まで二五圓の手数料で凡、通信も書けます。新しい市は必ず縣名を、又、新規か續續會員かを明記して下さい。

「浄土」 一月 號

昭和十年五月二十日
第三種郵便物認可
昭和三十一年十二月廿五日印刷
昭和三十一年一月一日發行

（定價三十圓）

編輯人 竹中 信 常
發行人 佐藤 密 雄

印刷人 春山 治部左衛門

印刷所 共立社印刷所

東京都品川區上大崎一ノ七八二
發行所 法然上人讚仰會

電話 東京八二一八七番

増上寺法主
大正大學長

椎尾辨匡

龍安寺住職 水谷辨知

淨土宗宗務長

渡邊眞海

大本山増上寺
布教師常任理事

山田鏡瑞

大本山光明寺

太野法道

正本堂佛具店
電話深川(64)五八四八

大正大學教授
文學博士

眞野正順

野村法衣店
電話芝(43)〇四二八

檀林傳通院住職
淑徳學園理事長

大河内隆弘

長野靜松寺住職 丸山宗隆

東京保育學校

内山憲尙

慈教婦人會

武田直子

魚籃寺住職

山田巖雄

大正大學教授

佐藤賢順

横濱大光院

宮林大廉

大正大學教授

佐藤密雄

光專寺住職

服部辨雅

大正大學教授

佐藤良智

淨土宗務所

宗務長 渡邊眞海

教學部長 吉水智承

財務部長 與本大倫

庶務部長 久家惺道

總務課長 小川秀善

教學部主事 藤木隨教

庶務部主事 野村宗春

財務部主事 高崎森暢

職員一同

春 頌